

プッシー・キャット

素敵な朝、美しい朝、清々しい朝、新しい朝。

朝を表現する言葉はどれも綺麗な響きがある。朝というものは、それだけ素敵で美しく清々しく新しい物を運んできてくれる、一種の象徴のような物なのだろう。

「はあくい、ここでサアイドチェストオ！ 続いてサアイドトラアイセツプスウ！ お次はフロオン  
ントラッドスウプレッドウ！ 締めはフロオン  
トダブルバイセツプスウ！ はーいマツスル！」

そんな朝を筋肉色に染める野太い声に、透也は目を覚ました。すぐ横の窓から聞こえる、悩ましのげな音楽とリズムカルなセリフの応酬。さらにテンションを上げながら続くそれらを遮蔽しようとして布団をかぶる。だが、声はどんどんとその勢いを増していく。

「あそーれ、マツスルマツスル大胸筋マツスルウ！ はあくマツスルウ！」

「やかましいわ！」

我慢できなくなり跳ね起きると、手近な窓を開け、こちらを見上げてきたモリモリマツチョの黒真珠頭めがけて枕を投げつけると、ピシヤリと閉めた。そして、大きくため息をついた。毎朝のことで慣れたとはいえ、せつかくの休みの朝からむさ苦しいさえずりを聞くのは堪える。

「彼も毎朝よくやるものだ」

「ああ、まったたく」

部屋の奥からの呆れた声に同意し、彼はベッドに座りなおした。台所から、ねこが両手にパンの乗った皿を持ってきて、机の上におく。彼女がその横に座り、手を合わせてパンにジャムを塗り始めるところまで待ったところで、透也は顎に手をついた。

「んで、なんであんたはここにいるんだよ」

自分の部屋でもないここで、平然と食事をして  
いる彼女に半眼で問いかける。彼女はパンをひと  
かじりすると、それをゆっくりと飲み込み口を開  
いた。

「良いじゃないか。君と私の仲なんだから」

「そういう問題じゃねーって。前にも言ったろ、  
勝手に入ってこないでくれって」

「合鍵をくれたのは君だろ。これは勝手に入って  
いいっていう意思表示だと思っただけれど」

確かに。合鍵を渡したのは本当だから、その部  
分は反論ができない。その場の勢いでカギを渡し  
てしまったのは失敗だったか。渡り鳥のようにフ  
ラフラと知人の家を飛び回る彼女に、程よい止ま  
り木を渡してしまったのかもしれない。その結果、  
こうして彼女の気分での部屋への出入りを許し、  
勝手に食べ物まで消費されている。そんなこちら  
の想いを知ってか知らずか、彼女はクスクスと笑  
って肩ほどまである髪をかきあげた。

「ま、いいじゃないか。勝手に入ってきているお  
詫びに、こうして朝食を作っているんだし、それ  
に私みたいな美人と食事できるなら君も嬉しいだ  
ろう？」

そういつて胸をこちらに見せつけるように腕を  
組む。彼女の服装は、部屋に干していたはずのワ  
イシャツとボクサーパンツだ、思わず視線を泳が  
せる。

「自分で美人とかいうなよな」

「否定はしないんだね」

実際彼女は美人だ、そこは否定できない。こう  
して一緒にいるのも悪い気分はしない。けれど、  
恋人でもない女性とこうしているのは倫理的によ  
ろしくないという思いもあり、そしてそれ以上に、  
彼女の兄の存在がちらつく。……あの人は物事に  
対してそれなりに理解がある人ではあるが、あま  
り変なうわさが立つようならば、どうなるか分か  
らない。

『透也よ、うぬは今にしてはなかなか見どころがある男よ。我が妹のねこも、それを見抜いているからこそ、うぬによく懐いているのだろう。あれほど同じ者のところに出入りしているアレを俺は知らぬ。ねこが望むならば、うぬの妾めかけにしても良いとさえ考えておる』

先日、彼女の兄にしてこのアパートの管理人である怜央れおに言われた言葉を思い出す。時代錯誤なしゃべり方だが、そのしゃべり方さえもあの人が発すると滑稽なものから、畏怖さえ感じさせる力を持つ。それでも、ここまではおそらくあの人の持つ最大の賛辞の言葉を貰っただろうことが分かった。ここまでは。

『だが、今のうぬではまだまだ足らぬ物が多すぎる、人としても男としても、だ。透也よ、ねこを妾としたいのならばこの怜央を倒し、超えてみせよ！』

……言葉に威圧される。それを気絶という身を

もって知った瞬間を思い出し、ブルツと背筋が冷たくなる。人間的な成長をすべき、というのは分かるが、なんでそこにあの人を倒す、なんて項目があるんだ。あの人に挑むなんて竹やりで弩級戦艦の戦隊に挑むようなものだ、ミンチよりもひどい状態にされるのは日を見るより明らかだ。

「大方、兄さんの事でも考えているのかな。大丈夫だよ、あの人はあの顔の割にはやさしいからさ。君の事も気に入っているし」

考えている事が顔に出ていたようで、クスクスと彼女に笑われてしまった。彼女の方はすっかりと自分の分の朝食を食べ終わったようで、また食器を片手に台所へ歩いて行った。

「さてと、私は行くところがあるから、帰らせてもらおうよ」

食器を流し台においたところで、彼女はそう言うてサンダルを履いて、玄関の扉を開けた。

「ああ、昼ごはんも冷蔵庫の中に用意してあるか

ら、程よい時間に食べてくれ」

それだけ言い残すと、ボタンと扉を閉めて出ていってしまう。家主にどうこう言わせずに、自分のペースでフラフラつときてはフラフラつと帰っていくのは、まさに彼女らしいと言わなければならないか。

「ワイシャツとパンツ……」

その自由っぷりは、服装にまで言えるあたりも、だ。

昼食はチャーハンだった。冷蔵庫の残りで作ったとは思えないくらいに出来はよく、すぐに完食する事が出来た。たまごが均等に混ざり、薄く醤油で味付けられた自分好みの味だったのもある。

口に残る余韻に浸りながら、またゴロリとベッドへ寝ころんだ。晴れた昼下がりの空気は暖かく、太陽のおいを深く吸い込むと、ゆっくりと眠り

へといざなってくれる。

と、まどろみのさ中、チャイムの鳴る音が聞こえ、彼はもっさりとした動きで上体を起こした。二度、三度と鳴らされるチャイムに舌打ちをする時、鉛のような体を動かして玄関へと向かう。

「あー、はいはい、もう出ますから」

投げやりに扉越しの相手に声をかけながら、彼は玄関のカギを外しノブに手をかけた。

「ア、ローハー！ 元気かい透也君！」

開けようとしたところで、扉がはね開けられて、両手を掲げるように広げた薬師やくしが叫んだ。

とりあえず、扉を閉めることにしようと思った。

「ちよ、ちよーとまった！ なんで閉めるかな、そこでさ」

無言で扉を閉めようとしたところで、その隙間に薬師の頭が割りこんできた。危ないやつめ。グリグリ眼鏡のロン毛男の顔なんて、そんなにアツプで見たくはない。

「何でも糞もあるか！ 玄関あけていきなりアロ  
ーハとか精神衛生上よくないわ！」

とつとと閉めだそうとするが、あのもやしのよ  
うな体のどこにそんな力があるのか、どれだけ力  
をいれても顔を扉の外へと引つ込めさせれない。

「人がせっかく友好的かつ情熱的な挨拶をしたと  
いうのに、何ていう言い草だね！」

「どこがだ！ ただの変人にしか見えんわっ」

お互い一步も譲らないにらみ合いがしばらく続  
いたが、いい加減バカらしくなり、透也は扉を開  
けた。薬師はしてやったりといった様子で眼鏡を  
クイツとあげると、白衣の襟を直す。

「まったく、最初からそうしてくれれば手間がか  
からなかったというのに」

「ああ、まともに訪ねてきてくれればいくらでも  
そうしますよ」

疲れる。目がしらを押さえるとため息をつく。

自称科学者のこの男、頭はいいのだろうが、どう

も行動と言動にそれが感じられない。

「それで、何の用ですか」

「なに、君を呼んでくるように言われてね。ちよ  
つと駐車場の方まで来てくれないかね」

「俺を呼んでる？ だれが」

「みんなさ。きたまえ」

イマイチ要領を得ないが、薬師はくいくいとこ  
ちらを手招きしてくる。……少々不安はあるが、  
部屋にこもっていても寝る事くらいしかないのだ  
から暇つぶしにはちようどいいかもしれない。

「分かった、行くよ」

見あげた空は青く深く、素晴らしく晴れ渡って  
いる。太陽の光は優しく、温かだ。心底昼寝日和  
とも言える日だ。今となっては後の祭りだが。

「と、いうわけで！ 本日は透也君の誕生日なわ  
けです！ 皆さま、盛大にお祝いしましょうじゃ

ありませんかあ！」

「イーイ！」

薬師の音頭に、料理の並ぶテーブルを囲む住人達が一斉に歓声を上げた。こちらと言え、薬師に肩を組まれてパーティ用の三角帽子とタスキをかけさせられている。タスキの文字は『本日の主役』。

濃いアパートの住人と大学の友人に囲まれた生活の中で、自分でさえも忘れていたが、今日は誕生日だったようだ。こうして総出で祝ってくれるのは嬉しいのだけれど、最終ストッパーの怜央が不在のこのメンツでは、それだけで終わる事はないだろう。

「おわー！ おい、蓮れんシユールストレミングあけんじゃねえよ！」

「ははっ、ついやっちゃうんだ……ってかくさっ、思ったよりも臭せえ！」

奥の方では早くも不穏な空気が漂い始めている。

「あー、まあ、あの二人はほっておいて、とりあえず乾杯といきましょう」

漂う腐臭をしっしと追い払いながら薬師が、みなみとジュースの入ったグラスを掲げた。それに次ぐように、一同が自分のグラスを手に取る。せっかく用意してくれたものだから、と透也もオレンジジュースの入ったグラスを掴む。

「それでは皆様、透也君の誕生日に乾杯！」

乾杯！

グラスを打ち鳴らす音がいくつか響き、誕生日会が開始された。透也も手にしたオレンジジュースに口をつける。ぐいっと中身を飲み干したところで、横からスツと薬師がソフトボールサイズの箱を差し出してきた。

「そして、こちらが私からの誕生日プレゼントになります」

受け取ったそれは、見かけの割にずっしりと重いそれは、上の面から取っ手のついた紐が穴を通

して中へとつながっている。そして、側面には大きく『ハッピーバースデー』の文字とピンクのリボンが巻かれている。普段がアレな割になかなか可愛いものをくれたものだ。

「ありがとな。ところで、これって何なんだよ」

「ああ、これですか？ これは、今日のために私が開発した、すばらしき発明品なのですよ」

今までにないくらいに嬉々とした表情で語り始めた薬師に、嫌な胸騒ぎを感じ、顔が引きつるのを感じた。この顔で彼が語る時は、大抵ろくでもない事になるだろう。

「これはですね、まずこの紐を引きます。あ、今は引いちゃいけませんよ」

「ああ、わかった」

「次にこの箱を投げます」

「投げるのか」

「で、これが標的にぶつかると爆発して、中から多量の鉄片が辺りに巻き散るよう——」

「あぶねえ!？」

手の中の危険物を思わずとりこぼす。それを薬師は地面に落ちる前に掴むと、ぷりぷりと頬を膨らませた。

「まったく、せっかくのプレゼントを落とすだなんて、ひどいじゃありませんか」

「プレゼントにクラスター爆弾ってジョークにもならないことする奴がいうんじゃないか」

「失礼な！ 私はいつでもまじめですよ」

もしそうなら、カエルの尻に爆竹を突っ込む子供のような無邪気さだ。無自覚なものほど怖いものもない。こうなると『ハッピーバースデー』の文字もリボンも悪い冗談にしか見えなくなってくる。と、薬師が声をひそめて言葉を続けた。

「それに、これを使えば管理人にだってひと泡吹かせられるかもしれませんよ」

「いや、無理だろ」

机上の空論にさえならない。あの人には、たと

えこれを使ったところでひと泡を吹かせるどころか、逆に消し飛ばされてしまうだろう。薬師も、やっぱりそうですかね、と呟いて腕組みをすると、「このまえ、あの人の前でこれの小型のものを爆発させてしまったことがあるのですが……大した怪我ひとつしませんでしたからね」

「いつも思うんだが、あの人は人間なんだろうか」「分かりません。私としては突然変異種説を提唱しますが」

二メートルを軽く超える身長に、山のような筋肉、そして金剛力士や閻魔も裸足で逃げ出すくらい顔。どこのマンガの世紀末覇者を彷彿とさせる怜央の姿を思い出す。あの人の前では、爆弾もびっくり箱程度のものになってしまふのかもしれない。というか、そんな事があったのならば、爆弾なんて作らないでほしかったものだ。

「まったく、何を話しているかと思えばそんな女々しい事を話していたのか！」

そう言って割りこんできたのはモリモリマッチョの黒真珠、もとい戸田山とだやまであった。……なぜか海パン一つなのは、いつもの事すぎて突っ込む気力さえ湧かない。その後ろには双原の双子がいる。こちらも相変わらずのゴシック衣装で、お互い寄り添うように立っている。

「いいか、そんな物を使って勝とうとするからいかんだ。あの人の素晴らしき筋肉に対抗するためには、おのれもまた素晴らしき筋肉を身につける必要があるのだ！ 輝かしき黄金比率の筋肉こそが！ すべてを超越する！ 力となるのだよ！」  
語気をどんどん強めながら、そしてどんどんポージングを繰り返しながら戸田山の主張は続く。相変わらずの筋肉バカっぷりである。

「と、言うわけで！ 私も君にプレゼントがある！」

「……大体予想はついているけど、なんですか？」  
「うむ！ お前はどちらも貧弱だからな、まずはプ



ロテイン！ もう一つプロテイン！ 最後に……  
プロテインだ！」

予想通りである。海パン姿のどこに隠していたのかは分からないが、彼の腕の中にはリットル缶と書かれたプロテイン缶が詰まっている。

「さあ！ 今なら私の仕事先の割引券もつけよう！ 君も一緒にレッツマッスル！」

「やらねえよ！ てか、ただけプロテイン押すんだよ！ そんなにプロテインあってもしかたねーだろうが！」

「なぜだ？ ちゃんと、バナナ味、バニラ味、ココア味と受けのよさそうで吸収率の良い物を選んできたというのに、何が不満なんだ？」

「まずはプロテインから離れる、話はそれからだ」  
清々しいほどまでの筋肉至上主義である。グツと力強くポージングをした戸田山の姿が神々しくさえ見えてくる始末だ。と、ゆらりと薬師が戸田山の前へと歩み出てきた。間違いない、彼の起爆

剤に火がついた。

「あなたという人は、またそうして原始的かつ野蛮なものをあたかも崇高な物にくっちゃべって……ばかばかしい。そのような力など、科学の前には児童に等しいんですよ」

「ほう！ だが、その原始の力こそすべての物事の発展の原点！ 純粹たる原点である筋肉の前では、科学など小手先の技にすぎん！」

そして始まる科学対筋肉の論争。信奉する者が違うもの同士、顔を見合わせればこうして不毛な論争を繰り広げてばかりいる。

「まったく、不毛な事が好きな二人だね姉者」

「まったくね、兄者。けど、楽しいからいいんじゃない？」

「激しく同意だね、姉者」

そんな二人を双原の双子がクスクスと笑いながら見ている。どっちが兄か姉なのか、いまだにわかりかねる。

このまま観戦していてもいいのだけれど、とりあえず何か食べようかと食事の並ぶテーブルへと向かう。

「いよう、主役殿、楽しんでるか？」

「一悟、お前も来てたのか」

モリモリとから揚げを食べていた一悟の横に並ぶと、唐揚げをつまむ。サクサクの衣と柔らかく仕上がった肉の食感、そしてしつとりと滲みだしてくる肉汁のうまみに舌鼓を打つ。

「ああ、お前の誕生日だって聞いたからな、料理もって駆けつけさせてもらったぜ」

「ってことは、これは全部お前が作ったのか？」

おうよ、っと誇らしげに胸を張る一悟。なるほど、通りで美味しいわけだ。料理の研究をしているのは伊達じゃない。

「ま、俺がやったのは仕込みとかくらいで仕上げやらは、なつめさんがやってくれたんだけどな」

「あーなるほど、だからお前が作ったって気がつ

かなかったのか」

「あの人の腕は俺も勉強になるところが多いからな。今日はいい勉強になったよ。帰ってきたらお礼を言わないとな」

そういつてグッと拳を握る一悟。どん欲なほど勉強熱心なところは、大学で会った頃から変わっていない。

「あとそうだ、プレゼントにミルフィーユケーキを作ってきたんだ。よかったら食べてくれよ」

そう言って、彼は机の上のプレゼント箱を指差した。

ミルフィーユケーキ！ 彼の得意料理の一つで、その味は折り紙つきだ。しつとりとしたカスタードとふわっとしたホイップクリーム。サクサクとしたパイ生地挟まれたそれらと、イチゴやブルーベリーといった果物のコラボレートは、舌のうえで天使がチークダンスを踊っているかのような気分させる至高の逸品だ。

溢れてくる唾液を呑み込むと、ありがとうと礼をいう。今度、一悟の誕生日にはどこか美味しい店にでも連れて行こうか。

「よー透也、ハッピーバースデー！」

その声と共にいきなり肩を組まれた。何事かと思つて、横を見ると、蓮がニヤリと口元を釣り上げて笑っていた。

「蓮、お前も来てくれるなんてな」

「おうとも。双原さんに会える機会をミスミス俺が逃すとも思っているのか？」

そう言つてグツと親指を立ててくる蓮。純粹な気持ちで祝いに来てくれた一悟とはえらい違いである。

「蓮、透也の誕生日なんだからちつとは自重しろよなあ」

「おおっと、安心しろよ、プレゼントも持ってきてるんだぜ」

そういつて、彼は手にしたビニール袋をこちら

に手渡してきた。

「結構選りすぐりの物を持ってきたつもりだぜ？」

ぞんざいな渡し方ではあるけれど、ある意味では実に彼らしいプレゼントの仕方なのかもしれない。そう思いながら袋の中を覗き込む。

「…：おい」

「どうだ。なかなか良いのが揃ってるだろ？」

「いや、お前…：友達の誕生日にAVプレゼントするってどうなんだよ、いったい」

一緒に覗きこんでいた一悟が目がしらを押しえながらつぶやいた。その言葉の通り、袋のなかには、女性があられもない恰好で映ったジャケットのDVDが数本入っている。

「ばーか、男の誕生日プレゼントつつたらAVか酒盛りか風俗って相場が決まってるだろうが」

「決まってねえよ。どこの基準だどこの」

下半身に忠実すぎる友人の息まく顔を半眼で見ると。まさかここまでだったとは、まあ分かつては

いたが。

「へへ、まあいいじゃねーか、貰つといてくれよ。それさ買ったんだけど、俺の趣味じゃなかったからさ」

「廃品処理かよ」

「まあそういうなよ。俺はもつとこう、おっぱいがでかくてスタイルのいい美人がいいんだよ。たとえば双原さんみたいな」

「いや、知らんがな」

本当に祝ってくれているかほとほと疑問ではあるが、彼なりの祝い方なのだろうと無理やり納得しておくことにした。それにしても、このAVはどうすべきだろうか。そんな事を考えていると、

「やあ、透也。さつきは言いそびれたけど誕生日おめでとう。相変わらず面白くて見てて飽きないよ。ね、姉者」

「そうね弟者。私からもお祝い申し上げますわ、透也さん」

またクスクス笑いをしながら双原の双子がこちらへと歩いてきた。いや、だからどっちがどっちなんだ。

「お、双原さんじゃないか！ 相変わらず可愛いらしいお姿で！」

「おいバカ、姉者に近寄るな、バカが移るだろ」

双原の姉（妹？）の方に近づこうとした蓮を遮るように兄（弟？）が前に出てきた。お互いに睨みあう状態になり、互いに顔をしかめている。シスコンと女好き、こちらもそりあわない者どうしが睨みあうことになったわけだ。兄の方の後ろではあらあらという表情で姉の方が成り行きを見ている。

「なんだとこの野郎。俺は双原さんと話をしてんだ、お前じゃねーよ」

「黙れ童貞。お前と妹者が話すことなんて一個もないんだよ」

「童貞言うな、この野郎。それはお前が決める事

じゃねーだろうが」

兄の方の挑発に蓮が食ってかかる。隣で一悟もあきれ顔でそれを見ている。

「はっ、童貞風情が。そうやって節操無く女と見れば声をかけるところが、ますます童貞くさいんだよ」

「うるせえ！ 童貞童貞言いすぎなんだよ！ いか、美しい女性には声をかける、これは男の遺伝子に組み込まれた必須事項なんだよ！ より良い子孫を残そうとする素晴らしき本能なんだよ」  
「だまれ！ そんな下半身と直結したような事言ってるから童貞なんだよ！ 自分の部屋で自家発電でもしてろ、バーカ」

最低な会話内容である。少なくとも周りに女性がいるのにする会話じゃない。しかも、当初の話題から内容がそれまくりである、一分とたたずにこれはどうなのだろうか。

そんな中、スツと姉の方が二人の前に出てきた。

そして、蓮をみて優しく笑う。

「あなたが私に対して好意を抱いてくださるのはわかりますけど、兄者の言うように、あなたのように万年発情期の猿に言い寄られるのはうれしくもなんともありませんの。話しかけないで頂けませんか」

そう言ってもものすごく冷たい表情をした。ツララでも突っ込まれたような表情で硬直した蓮をしり目に、二人は

「あ、これプレゼントのビスケットです。よろしければお食べになってくださいね」  
「さっすが姉者！ 素晴らしい切り替えだ！ あ、これは俺からね」

先ほどの事なんて無かった事のように、リボン巻いたプレゼント袋をこちらに手渡すと、その場を離れていってしまった。あまりにも容赦のない切り捨てである。

残された蓮の肩をポンと一悟がたたくと、彼は

がつくりと膝をついた。そして、許しをこうように両手を地面について四つん這いになる。

「ま、まあ、そんなに落ち込むなよ……」

「そ、そんな冷たい目で俺を見るなんて……」

慰めようと触れようとしたところで、彼はダンと地面を叩いた。

「興奮するじゃないかあ！」

もう放っておこう。四つん這いの姿勢のままビクンビクンとしている彼を無視して、一悟と一緒に食事の続きをすることにした。

「よお、透也。食べてるか？」

一通り食べ終わったところで出茂が声いずもをかけてきた。近づいてきた彼の息からむわつと鼻につく匂いがする。

「酒飲んでるんですか？ まだ真昼間ですよ」

「いいじゃねーか、祝い事の席で飲まないのはウ

ソつてもんさ！」

そう言っただけで出茂は手にした酒ビンに口をつけた。二度三度と喉が動いたあと、大きく息を吐き出す。アルコールの匂いがきつい。

「はーっ、やっぱこういうときはウイスキーに限る。お前ももう少し酒に強ければ一緒に飲めたんだがなあ」

口惜しそうに言いながら出茂はまたウイスキーを煽った。ウイスキーとはそんな風に飲む酒だっただろうか、と思ったがそこは酒飲みの出茂らしいところなのかもしれない。

「すいませんね、飲めなくなっつて」

「いいさ、気にすんない。俺が飲みたくて飲んでるだけだ、お前が無理して付き合う必要はねーさ」  
そう言っただけで彼はケラケラと笑い、またビンに口をつける。

「あ、出茂さんまた飲んでるの？ 飲みすぎですよ」

その様子をみていた優ゆうがちよつとあきれたような声をあげた。世話焼きな彼女の言葉に、出茂はへつと口をへの字に曲げる。

「なんだよ優、いいじゃねーか、祝いの席なんだから、固い事ゆーなよ」

「そう言つて飲んでばかりじゃありませんか。今に病気になっちゃいますよ」

「へーへー、わかつてるよ」

ふてくされたような顔をしている出茂の顔に、思わず笑みが出てしまう。これではどっちが年上なのか分かつたもんじゃない。たとえるなら、駄目な親父としつかり者の娘といったところだろうか。

「ところでよ、ねことはどうなつてんだお前？」

出茂がふと思ひ出したように聞いてきた。

「あ、それあたしも気になります。どうなつてるんですか？」

「あー……そんなどうなつたなんて事もありません

よ」

優までキラキラと目を輝かせて聞いてくる。面倒な流れになった。そりゃ、進展があつたら自分だつて嬉しいが。

「えー、そうなんですか、ちよつと残念です。：けど、ねこさんが透也さんの部屋によく行つてゐるって聞くんですけど、それでもなんにもないんですか？」

「優、そういつてやるな。ねこの後ろにはあの大将がいるんだ、何かしたくてもできないんだろしさ」

出茂の同情するような言葉に、ああーと優だけでなく周りからも声が上がった。気がつくといつの間にか住人達がこちらの話に聞き耳を立てていたようだった。今まで好き勝手に騒いでいたはずなのに、この話題になるとなんでこう集まつてくるのだろうか。

「確かに、管理人の理論はあまりにも非科学的で

野蠻だ。生活の中で己を磨くのはまだしも、拳を交えることで何かが見えてくるなんて、おとぎ話もいいところだ」

先ほどまで戸田山と激しく論争を繰り広げていた薬師が肩で息をしながらずれた眼鏡を直す。

「なーにを言っている、拳を交えねば見えぬ物もある、そういう意味では怜央の言っていることも間違いではない！　ただ、まあ、日々成長どころか進化していく自分を倒せなどと言うあたりは、本当にねこを透也の嫁さんにしたいのかどうか疑問に思えてくるがな」

戸田山も顎に手を当てて苦笑する。周りからはわかるわかると言わんばかりに、感嘆の声がある。

「そもそも、あの人はシスコンなんだよ。ね、姉者」

「そうね、もう三十路も超えているんだから、そろそろ妹離れするべきなのね、兄者」

そう言いながら寄り添っている双原の双子。そのセリフは鏡を見てから言っただけだ。だが、周りは気にせず二人の言葉にうなずいている。蓮が手を上げた。

「ていうか、あの人のしゃべり方ってどうなってるさ。二人称が『うぬ』なんだぜ？　最初どこの痛いおっさんかと思ったよ」

「あー、あれか。なんでも、あの大将昔っからあの見てくれだったらしくてな、周りから王様みてーにまつり立てられることが多かったんだと。んで、自分もそれっぽくふるまっていたらいつの間にかあんな風になってたんだとさ。三十路過ぎても抜けないとか、一体どんだけ刷り込まれてんだよってのはなしだよな、これ」

半笑いの出茂が説明すると、クスクス笑いが起きる。

「しかもよ、大将あの顔してすげー甘党なんだぜ。この前なんて駅前のカキ屋の限定シュークリー



ムが買えなかったって、あのでかい体をこーんな小さくしてしよぼくれてたんだぜ」

右手でちよいと形を作る出茂に、ドツと周りが湧いた。確かに、怜央がああ体型をしよぼんとしぼめて落ち込んでいる様は想像すると、あまりのギャップに笑いがこみ上げてくる。

周りを追うように笑いだそうとしたところで、背筋を走ったソレに透也は笑いを取りこぼした。

「あー面白い。管理人さんも可愛い部分があるんですねー」

「そうだね、俺も今まで近寄りたいたいすげー怖い人だと思ってたから、意外だよ」

一悟の言葉にうなづく一同。透也は顔をつうと冷たい汗が流れるのを感じた。

「まあ、あの顔だもんね、妹者」

「そうね、弟者。ねこさんの兄とは考えられないくらい怖いわよね」

「違うない！　ありやもう、どっちかが突然変異

でもしたんじゃねーかってくらいの違いだよな」  
そういつて、またドツと笑いがあがる。にじりにじりと、周りに気づかれないように後ずさりする。

「しかし、あれで既婚者だというのだから、不思議なものだ。おまけに奥さんは跳びきりの美人ときている。」

「はっはっは！　まさに美女と野獣……いや、美女と鬼といったところか？」

また大笑い。完全に悪乗りしはじめている。とにかく、人知れずある程度距離をとると、透也はまとめておいたプレゼントの山を抱え、姿勢を低くこそそそとその場を抜けだした。

ちょうど抜け出した瞬間、

「そうか、うぬらそんな事を考えていたのか」

マンガなんかでしかあり得ないと思っていた物を、また実感することになるとは思わなかった。

こうして離れているというのに背筋を嫌な汗が流

れ行く。突如として会場に現れた伶央は、地鳴りが響くくらいに一歩一歩を踏みしめ、硬直した住人たちの元へと歩いてく。一同の前でその足をとめると、引きつった顔の彼らの前で拳をグッと握った。

「覚悟は良いか」

逃げ出した背中に悲鳴がぶつかってきた。

「お疲れ。ずいぶんと貰っているね」

渡されたプレゼントを抱え、ふらふらと部屋まで行くと、ねこが出迎えてくれた。また勝手に部屋に入られていたのは気になるが、両手がふさがっている今にしてはありがたかった。

「戸田山、行け！ こっちで援護する」

「任せろ、薬師！ わがマッスルパワーの真髄を見せてくれる！」

「蓮が拳圧で吹っ飛ばされたぞー！」

「姉者支えてくれ、蓮を受け止める！」

「分かったわ、兄者！」

「誰か来て！ 出茂さんが虫の息なの！」

向こうは阿鼻叫喚の世界となっているようである。まあ、そのうち近所の人たちが介入して騒いだあと、自然と鎮火していくだろう。月に一回はある風物詩だ。…だとしても、巻き込まれるのはごめんなので、透也はそそくさと部屋の中へと入った。

部屋に入ると、机の上にはショートケーキと湯気上げるコーヒーが二組おいてあった。

「ささやかながら、私からの誕生日プレゼントだよ」

ハッピーバースデイと添えると、彼女はカーペットの上に座る。つられるように透也も対面へと腰を下ろした。外からは、さらに激しさを増す怒号と叫び声が爆音やら破壊音にまぎれて聞こえてくる。

「大丈夫だよ。兄さんのことだ、ちゃんと手加減はしてるよ」

仮に手加減されていても、拳を振っただけで人をふっ飛ばしたり、片手で車をひっくり返されたりすればこっちの命がいくつあっても足りない。

それでも、大けがする人がいなくなったりする辺りは、言う通りに手加減をしているのだろう。だからこそ、あの住人たちもなんやかんやと言いながらも楽しそうに騒いでいるのだろう。もちろん、自分も。

「そういえば覚えてるかい。今日は君の誕生日でもあるけど、君が初めて私とあった日でもあるんだよ？」

思わず目を丸くした。確かに一年前のこの時期にここに越してきたが、ねこと会った日までは全く覚えていない。いつの間にか話すようになり、いつの間にか部屋に入りにしてくるようになっていたように思えたからだ。

「その顔じゃ、忘れてるみたいだね」

「すいません」

「謝ることは無いよ、私がただ覚えているだけなんだから」

そう言ってくれたけれど、彼女はちよつと目を伏せた。言い知れぬふがいなさがこみ上げてきて、透也はコーヒーに口をつけた。熱い、そしてほろ苦い。

「前から聞こうと思っていたんですが、ねこさんが俺の部屋によく来るようになったのってどうしてなんですか」

ぼつと言葉がこぼれた。目の前の彼女は、静かに一口ケーキを口に運ぶ。小さく顎を動かした後、少し間を開けてからまた口を開いた。

「君を気に入ったからだよ。それこそ、このままずっといたいと思うくらいにね」

…思考が止まる。この時の自分にはたから見れば、ずいぶんと間抜けな顔をしていただろう。

かけられた言葉を一つ一つ拾ってつなぎ合わせていく……これはつまり、告白と考えて良いのだろうか。心臓がバクバクと鼓動を刻み始める。顔が熱い。落ち着くためにケーキを一口ほおぼる。やわらかく、甘い。

こちらの様子がおかしかったのか、彼女はクククと薄く笑った。

「けど、あいにくと今はどこかに飼われるつもりはないよ。気の向くままにあつちへこつちへとフラフラしている方が楽しいからね。名前の通りに、ね」

その言葉に、高揚していた気持ちが水をかぶったみたいに静まってきた。確かに、彼女がどこかにいつく、なんていうのは想像しにくいし、なによりもらしくない。それが彼女が彼女たる理由なのだろう。

と、そう言ったあと彼女は少し考えた後、いたずらっぽく笑いながら言葉が続けた。

「そうだね……君がもう少し成長したら、飼われるのも悪くない」

半眼でじっと見つめ返すと、予想していた反応と違っていたのか、彼女が首をかしげた。

「……そんなセリフ、どこで覚えてきたんですか」

「双原のもってるゲームだよ。男はこういうセリフを言うと言ふんだろ」

また出先で変な知識を身につけてきたみたいだ。ちよつと苦笑しながら、コーヒーを口に運ぶ。

「あんまりそんな事を言っていると、誤解されちゃいますよ色々」

「大丈夫、こんなことは君にしか言わないさ」

一口飲んだところに言われたセリフに、むせかえってしまう。せき込むこちらを見て、彼女はニヤニヤと笑っている。見事に手玉に取られてしまっている自分が情けない。

「だから、そういうセリフは誤解を招きますって」

「これくらいは流せるようにならないと、これか

ら苦勞することになるよ」

今まさにその苦勞を感じている身とすれば、なんとともまあありがたい助言である。服の裾で口元をぬぐいながら彼女を見つめると、彼女はまたいいたずらつぽく目を細めた。

「私を飼いたければ、兄さんくらい納得させてね、透也」

その言葉に、透也は息をついた。フラフラと現れたり消えたりする割には、縄張り意識が強いようだ。こちらが歩み寄れば離れていき、離れれば寄ってくる……本当に名前の通りの人だ。自由で、自分に正直で……今の自分に無い物を持っている人。愛か尊敬か、はたまた嫉妬か、どれにせよ彼女からは目を離す事が出来ない自分がいる。なにより、この笑顔には勝てない。

まずは、ジョギングとトレーニングから始めてみようか。コーヒーの水面に映った、ゆるんだ顔の自分を見つめながら、透也は胸中でプランを立

て始めた。